

日本心理臨床学会 第 36 回大会

医療法人水明会佐潟荘 臨床心理室

11月18日から21日までパシフィコ横浜で行われた、日本心理臨床学会・第36回大会に参加してきました。その中で興味深かった2つをご紹介します。

1つ目は、発達障がいの子どものプレイセラピーに関するシンポジウムです。このシンポジウムでは、ASD傾向のある子どもや大人が日常生活で困りやすい理由の一つに、彼らの主体性の弱さが仮定されていました。シンポジストからは、「『(人間には)自分がある』という仮定自体を疑ってみる。」「発達障害の対人関係の困難さを、運動下手な方が野球をすることと例えると、キャッチボールが上手くないという以前に、ボールを握ることすら難しい人もいますのです。」と云った説明が出ました。改めてクライアントさんが感じている世界に真っさらな気持ちで関心を向けることの大切さを確認し、またASD傾向のある方へ、感覚を介した遊びや関わりが持つ可能性を知ることができました。

2つ目は、「見る」と「眺める」を通して、意識の本質と多様性を考察する講演です。演者の上田琢哉先生が、道端にある石に目を留め、街中の路傍の石を観察することからこの研究が始まったという経緯からして、先生の豊かな感性が感じられます。上田先生の講演では、「現代においても、セラピストはクライアントの意識の偏りを補うものとして

機能し、治療の場は患者さんと治療者が共に困っている問題や現状を『眺める』所」と示唆されていました。そして、現代は意識して「見る」ことの多い社会であるが、個人で「見る」には限りがあるとも、言われていました。講演を聴きながら、一人では捉えることの難しい問題を患者さんと治療者とで想う時、解決の糸口や、治療の先にあるよりよい「何か」～生き方のようなものでしょうか～が見えるかもしれないと、これからの精神療法と心理療法の効果の一つを見付けられたように想われました。